



利
1077
44/45



竹河

十四歳

兼之の氏十四日入り申す
ありと申すあり

頼正大臣薨逝後玉鬘内侍より

玉鬘御殿姫君連自方より給事

兼之為四位侍従なり

そのころ十四日入りとあり

十八歳

四位侍従

正月一日右大臣以下人々未尚不許事
又音右大臣小玉鬘髮君而物詣事
同日系入道文三条文治事
夕付向四位侍從系尚侍孫事
重字凡相君詠梅奇事 主侍臣勅事
同七余有四位侍從渡友侍從許事
苑人少將來會事
四位侍從彈和琴事
相似故致仕大臣凡音事

藤侍從歌竹川事

翌日四位侍從送文花友侍從事

三月尚侍婚君姊君之妹君打基孫事

友侍從見記事

以楊樹為基懸物事 右勝事

苑人少拍垣間尺事

苑人少拍來友侍從許憂姊婚君事

又來中拍房述懷事

四月上賜達公尚侍內前中念人事

中將以許紙一苑人少物

九日玉警服姊姊君系冷泉院

母君同系行

其日苑人少物送消息中將

尚侍之也
私但姊姊君也

源侍後常系冷泉院事

見友書事

苑人少將嫌妹姊君

涉門石中將送鱗姊君西中將

尚侍給事

自七月冷泉院西息前姊君懷妊

源侍後常系院作西給事

十六歲

正月男踏款事

系冷泉院事

源侍後常系冷泉院

院源西息前西方源侍後常系西

侍徒与女房音物信事

御進事

四月院内皇女誕生女宮

中姉入内讓ふ高侍職事

玉鬘上有出家し志

十七歳

十八歳

十九歳

秋任中納言

兼為宰相中納言

親云々の中より源氏流と云ふ

さのんちりしと云ふ一宰相中納言

てとありし兼十六歳の秋云々の源氏流と

云々のと云ふ宰相中將と云ふ

之位中將嫁竹川丸大臣女

け之位中將の兼人少納言と云ふ

片の西子之位中納言と云ふ

人々昇進事

又晋右大臣將丸大臣 按察大納言任右大臣

兼丸大臣

董宰相中將任中將之位中將任宰相
以推本考之此除目不當年終之
源中細言彙玉警吏尚侍中交事
前尚侍熱院所息所不安涉事給之

里居給之

紅梅右大臣大卿食信申兵馬交給之
前尚侍謂紅梅右大臣與披柱君同事
大卿食羽立日宰相中將系前尚侍

所行也

宰相中將元七八

竹河

白宮並二卷名歌并詞有

⁶四位侍從送藤侍從奇

養人少将子冷泉院女房贈答奇

又正月四位侍從在侍從同音歌曲

上件ノ並ハ人並ノりの列傳ノ史記ノ
同傳ノ五人也之人也ニ事ハ成ル

い物指同傳の列傳いまこありのい巻
小玉指の一類と竹川の太臣と伝同
傳ののすあり

年純のの法正ののしく蓋はさとして
いつくわら十四歳よりよりかよりて法正
正月より七月よりより又法正はさあり
又法正はさして年より法正のりより

あれ白言を

蓋はさ十四歳

日秋中將

加潜 十九歳

い巻始四位傳後 終中納言をりて

こと合し

い巻の末中納言は但す推布の時代へ
然ハ十四歳より十九歳よりよりて法正
の事い巻よりあり

い巻の末十四歳より十九歳よりよりて法正
い巻乃末を印梅と同時へ

横登の抄法乃時ハ

先太度ハ横之 自是其ノ事ハ横之

未変登ノ並死

ハ是ノ未ニハ意中納言任す句文事ノ事ハ

中納言のりケルモ 然レ登ノ並死

箋曰不任尚流の事ハ並死

の事不用之令名レ後為列傳之

諸抄の趣一性流すと云々モ是と

けつ久人云之

私誌抄の抄法と皆會して義ヲ流と

らるる其旨代註之四所モ其ノ旨

より之ヲ辨之別ハ有也

^私卷名以号并詞号レ横の並ニ又未ハ登

の事ハ意十四のりト云レ次ニ次年正

月より七月まで書ク又次年ハ其ノ事あり

又年ノ事ありてし何レモ其ノ事ハ其ノ事

と見レ多ク 其ノ事ハ其ノ事

おまの源氏乃西よりあはれおれおへ

後の大後より

た

乃らの大いよのいむけ思のゆゑに
妻あをみたり西より孫の舞思の
大后の源氏の西子孫よりあれより
よりおむらの心付のよ源氏の西
子よりあより

昇

凡物結と紫式部作ともみを
是乃始より事これ始也

源氏の西よりあはれおれおへ
源氏よりあれより孫より北より
乃事よりあはれおれおへ
くろあよりいむけ思のゆゑに
源氏乃西よりあはれおれおへ
大改大后より後の大いよの
いむけ思のゆゑに
は教端紫式部作とみを
のつふ事乃初より 源氏乃西

そりやとてゑるれとむ多説いり、頼忠
とてよよ阿ふんむろくとそそそむ頼
忠の家ありいひむくらあそりともり
源氏の行ふ之実事ありぬり也

案

これハトハむろとれ事ハ巻乃ハ云むり
傳子孫の行ふ法うくとそそ用之の
竹川大木とて同傳事あれと記と源氏
の所そりやとそり孫之族也 光源氏
の所一族ありあり頼忠乃ハむろ

云ふあれハ源氏乃と川傳事とそそ
よ達とあり也 花鳥と秘と破れと
秘と謬とあり

所詮これハ川放て源氏の所そりと云
り頼忠ありありとそそ一そそ源氏
と致仕事とそそとそそとそそと
源氏の一族と離れとそそとそそと
ハ一向源氏後大坂頼忠之此義也
梅事ありあり

秘
のちれち後　あみふくゆり

わかこころ

可　西の後達

しつとんれのもつり　あみふくゆり
黄々にしりあみふくゆり　あみふくゆり
源氏のゆきふくゆり　あみふくゆり
これあみふくゆり　あみふくゆり

あみふくゆり　あみふくゆり
花鳥伝わり　あみふくゆり

秘
あみふくゆり　あみふくゆり

中文のゆきふくゆり　あみふくゆり
あみふくゆり　あみふくゆり
あみふくゆり　あみふくゆり
あみふくゆり　あみふくゆり
あみふくゆり　あみふくゆり

秘
あみふくゆり　あみふくゆり
あみふくゆり　あみふくゆり
あみふくゆり　あみふくゆり
あみふくゆり　あみふくゆり

のちれち後 ちみみちり
わかこうら

河 悪後達

紫れゆりやとにきりれと

紫上は源乃様子かて後よい言てむ
ろくろの様子て後よけくあはろくろ
多いろりろりさそにさめさそいさろ
花鳥流りく 奇美

花 紫のゆりさそいさそい白文一高きいあじ

中文の西くかれと紫とれ御一なひ
うさゆりもはじりさゆりのゆりさそい
ろくろの事いゆにさめられぬよあれ
ろくろさそいろくろあそいさそい
かろあそいとさろろあさめられ
ちみみちり

6
鎌足大臣を光源氏の後りれもあ
とさそいれいのもちありろくろ達達
乃物流りさそいさそい事やと云く

紫れゆり
紫上は
ろくろ

かろ女と

つかこめられおらうとせしめられおらう
てとて

源氏乃西十集くまひうこころのまうこころ

いつまうまうこころ

けまの始りりけ初まうこころまうこころ
の初こころこころこころまうこころ
あつれまう初初の時代人の准提まう
人まう人まうこころこころ

さう事の初まうこころまうこころ
まうまうまうまうまう相無帝准延在帝光
源氏比西又た大上事お也

花

けひり事とつこめ人冷泉院と相無
のみまうこころまうこころまうこころ
源の源氏君の初まうこころまうこころ
まうまうけりまうこころまうこころ
まうまうまうまうまうまうまう
かろ初けりまうこころまうこころ

所す松くみありのりさうりさうりわたり
とひけきん事ハさうりさうりあり
去り井りわたりさうり冷泉院の事
又玉うり此君ハ後仕乃大臣此西じと
あきと夕鳥とのさうりて深氏乃字
此はくにあのいさうり又さうり大お女
と文乃うみゆゆさうりさうりて深
氏のゆ子此ゆん系園かさあとのせ
ゆきと城ハ柏木のあつゆを孫とま
さうり忘祿乃松とさうりさうり
事成ゆりさうりまうりさうり
侍とさうりさうり船さうりさうり
人乃志さうり事あれ人のいさうり
やかとおかゆゆさうりさうりさうり
乃初あひさうりゆきとさうり
河海説あやまれさうりさうり
齊
さうり乃実父かさうり深冷おさうり
たの見花鳥

秘 兼

花鳥小くく志あきらて然

花鳥小く

花鳥小

冷泉院乃く進より西事

花鳥源の實子小あきら

文小の上乃くゆへむうくと是女の

あきら書育のゆ

かくれなき事た小分物然する人の

あきらこれ小意の元来とゆへ人の

かくり中女一宇治かくへこれ序より

あきら人の子載の後れ名氏かきる

事くこれ教誡の義

花鳥源の事これ教誡の義

秘

花鳥 小

花鳥源の事これ教誡の義

あや一よりきりいつまの海とゆへん

兼

老れひのみめてすらとたれたる

一定やらん又花鳥源物乃見え中

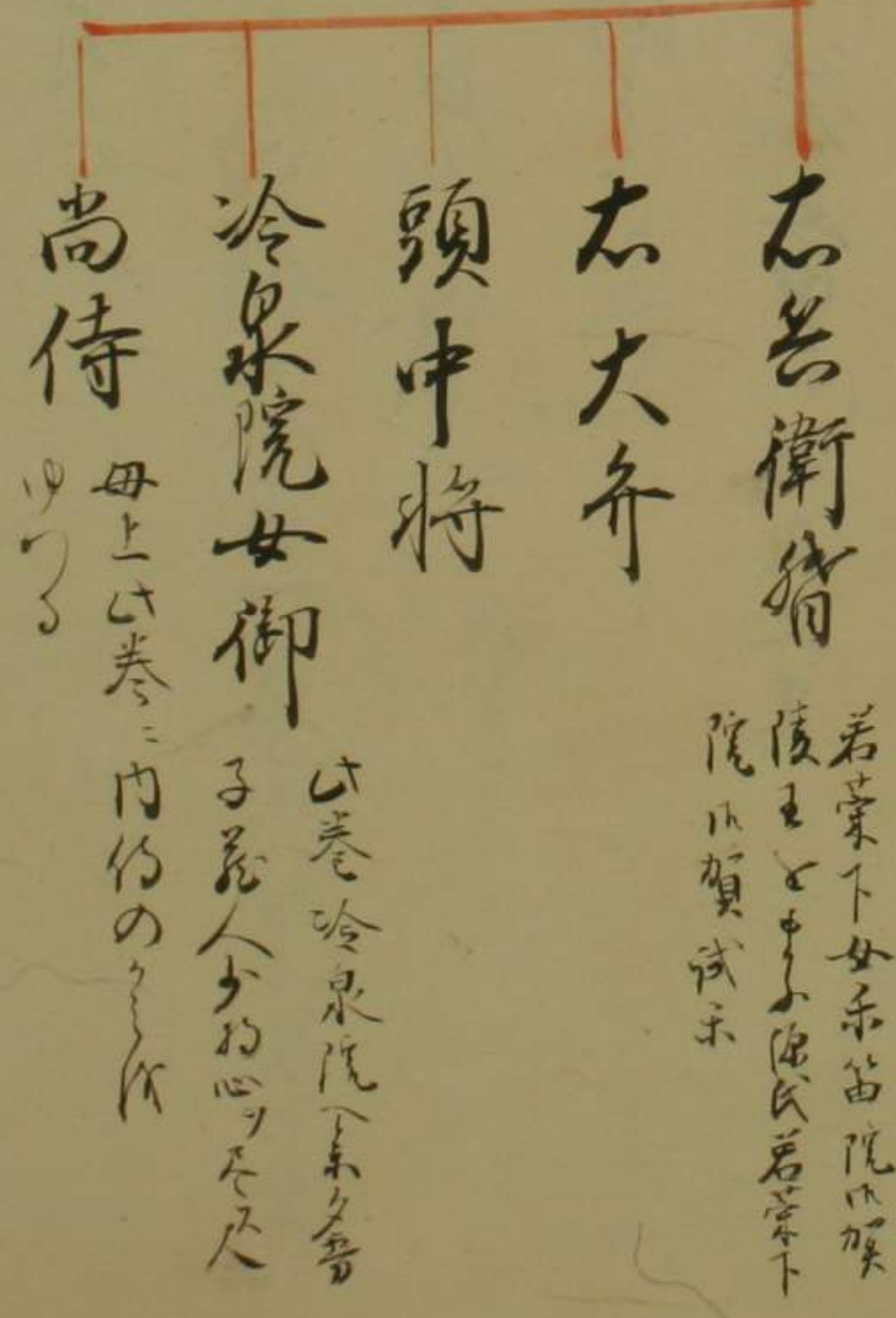
つと物あはれまゝあてるらんゆへ

治定——
 十四指の本意成りあり
 ありと交して式あり
 式は武部、交して
 と見てもあり

内侍乃り
 此腹女子五人あり
 二人は

ねとこ三人女あり

義
 髯黒相國



此三人の先帝式了卿乃内女の腹へ
 あくくせ始あり

秘 舞黒乃薨——ゆつらん 花
并 頼忠うせし後の開白ハ誰ともんてん
美 ひを黒薨のゆ始てみるかり雪隠の
うちにもてんまへ

いそさおれ
秘 内中りのゆ 美

人の心とさめの
何 人心好悪不常 白氏文集
まかりしあふこちかく

何 領給

かん乃君れゆちんゆり
并 頼忠の子孫とや
秘 致仕大臣とれ事 花考
美 致仕大臣方印梅大臣一家乃繁昌する
るゆり

申く御んしれまゆあふひれとらと
あふかりさる
頼忠のかくせし時ハ法与権場とあふ

ふもありて志さう〜か〜さう〜か〜し
今ハ又紅梅の威勢は〜して又ソい
〜い治りぬれ

り〜り〜と志さう〜か〜さう〜

^秘 舞志ハ波仕大居〜人は〜い〜い〜い
ありし也也

笑云い義あり〜

あ〜れ〜る〜け〜さ〜う〜し〜れ

^秘 巧言令色た〜れ也

^義 秘巧言令色る〜れ也〜秘ラハ言れ字〜

り也

義曰故夏〜色〜り頼志の性成〜也
通居あり〜本す〜う〜人〜と〜不〜が〜さ〜り
情〜と〜進〜い〜ぬ〜わ〜り〜世〜よ〜志〜さ〜う〜し〜れ
た〜義〜也

ひ〜〜〜〜と志さう〜か〜

^秘 と〜れ〜ら〜る〜あり〜也 義曰秘〜義〜る〜我
と〜義〜成〜る〜ゆ〜て〜物〜は〜用〜捨〜と〜あり〜也

或人其く又いさし何んぞ

ふ所^義進多事もあり多分ありや

玉^義くも頼^義思^義く^義む^義れ^義て^義う^義と^義く

一^義一^義

る^義成^義じ^義く^義に^義ひ^義り^義て^義は

^秘玉^秘く^秘く^秘よ^秘巡^秘分^秘あり^秘畢

中^秘宮^秘の^秘所^秘く^秘く^秘は^秘き

^秘明^秘石^秘中^秘文^秘く

右^秘大^秘殿^秘を^秘く^秘く

^秘夕^秘音^秘と^秘大^秘切^秘也^秘く^秘く

に^秘く^秘く^秘表^秘す^秘る^秘は

^義大^義名^義忠^義信^義右^義大^義弁^義録^義中^義將^義也

あ^義ら^義れ^義る^義事^義と^義阿^義達^義と

官^義位^義乃^義昇^義進^義か^義く^義ら^義ふ^義く

い^秘り^秘君^秘を^秘く^秘く^秘と

^秘玉^秘く^秘く^秘の^秘心^秘く

お^秘く^秘あ^秘い^秘ま^秘い^秘あ^秘ん^秘せ^秘く^秘月^秘と

お^秘く^秘あ^秘い^秘ま^秘か^秘く^秘成^秘く^秘く^秘ひ^秘て^秘く^秘く

給少丈

申文乃のよく

秘

明石中宮之

美 翠

己れ人じとくに

秘

吾徳ととらへらるる

くらうらうらとらるる

秘

己被揚妃遙側目

白氏文集上陽人 美

上陽人の詞

じうかゝるて

美

むろくと舞ふようれは

いよん南てはさる

秘

冷泉池より此世初也

いよるる人妻事かん

秘

むろくとむろく

いよるる此とくらあ

美

むろくの文は人母

ひのかく頼ふ乃宿世

これ世乃末

美

子の世のト心

右大臣の孫一人少将

夕音の五男 源宰相中納言

雲井存久

人々といふは行へり

此志又字と云はれ

當意乃事也

いひこりつきて

夕音は孫一人少将の玉

つゝ源氏の孫子あり

んの後も切なり

くわたり

雲井存久 女将の母なり

くわたりかたに

あり

涉官たり

ハ親服なり

ねと

夕音とありあり

後、夕音も言升るも、〜みりあ也

ひめ君といふは乃さゆ也

^事多し人りいあはせし也

^秘おろしれを言てあひ君は父大旨と造云

ゆて内事りりゆとあからしよのゆて

次のよの君人少お昇進とありていゆり

とて〜し〜也 ^義

捨てし給すいぬとみとらりけいへく

^義少将乃造也

あ〜の給〜むむ〜の〜

^秘多海〜事〜の〜給〜れ〜と〜

きあ〜つ〜ん〜也

^秘自然わ〜し〜り〜あ〜つ〜の〜事

と〜し〜割止〜は〜人〜事〜也

^義是いやりてむ〜し〜れ〜方〜よ〜め〜と〜ら〜

給つ〜之〜疑〜思〜乃〜事〜の〜れ〜

〜し〜し〜る〜ん

^秘腐く又下也

六条院の正末小すき院のこ宮此はく
生れ給つる君

花 是の葉大ゆりて十四少く元勝

秘 て侍後小何とて

秘 以下小何とて

兼 卷の中混乱とて此は四位侍後とて

とてての末りててて此はく系圖

とくくあてあてて此はく

四位侍後

秘 葉之十四又りりてあか白文乃是

此始小あてりり 昇

あの後ちりの後

秘 此後とて此はく三葉文の女

文此在何と 花昇

是くちりよ此はく

兼 葉之乃ちりよ此はく

こくおてりり

かちりれり

^美夕音乃西子此翁人少将之

心より〜書みふ後りいり

^美媚ら姿の美を〜書乃〜しり

六条院乃西け〜ひちり〜

^秘美の源より〜とるを〜也 ^美昇

ふけ〜物さあ〜

^秘玉〜物〜を〜り〜也

^秘玉の津〜先中才〜り〜也

院乃西〜

^美源の西事

じ月のはい〜り此

^秘玉〜り〜也

^秘かんた君の西〜り〜也

^秘紅梅乃大長け此大納也

昔より此〜り〜

^秘け大納言乃後〜り

夜中納言こ大後の古部

^秘夜中納言の録是乃西子母〜り

ひよりたふいさし一人或るまはは女
是も夜中細言は泣き止むる事
は夜中細言は紅梅乃水方此被推
よと一版の兄弟

はらりりり

秘 夕音とらり

やうかたはらひはつと位もはつ

秘 夕音の馬より音聲を子連成と

うはつまをふさば

秘 飛人少将事

おしとありかるり

秘 姫君のりともり

おしとありかるり

秘 夕音とむらと

うはつまをふさば

秘 夕音の詞

うらまひ

畚内乃と

ワタシとのことゝい

何

シノコトモ

シノコトモ

男共

倍人

狂仙居

いまりめたり

養

識く

私物候いひとしめり

紅

まゝす人ふりしとやと

今いゝ世に母の教りしと

花

おろしれは昔親と

色

紅

色あしは事と

源くやうにさあひまらも源氏の遠徳

中火

院

紅

院しりのねり事

冷泉院より姫君のこれ作し養

内

紅

内よあけせし事

夕音れ親養

女

花

女一文の女所いゆり

冷泉院女一文の所母女所こゝに夜い

つりれあひの事

養

こゝろあへ用捨あへ

不審也

弘徽女昇久し〜冷泉院一文母の事

不審弘徽女秘と私秘と久し別女一

宮乃母女秘也不審也

女御秘久し秘く秘女

むろくの約秘等

あまのれ昇久し秘あり

むろくの事昇等

三条文母昇久し昇女と文

秘女と宮乃秘久し秘夕音秘は信秘を秘て

今秘も秘あり秘なり

すく秘院の秘久し秘と秘久し秘久し秘三条

院の秘久し秘海秘也

秘是秘、秘海秘之秘集秘院秘又秘源秘氏秘久し秘つ秘光秘

と秘女秘と秘文秘母秘久し秘く秘つ秘光秘れ秘と秘あり秘也秘昇

あ秘の秘久し秘た秘道秘中秘将秘氏秘中秘并秘侍秘候秘君秘

秘是秘、秘皆秘集秘久し秘子秘建秘久し秘右秘大秘臣秘此秘所秘也秘

て秘三条秘宮秘久し秘中秘将秘并秘下秘此秘基秘の秘所秘久し秘久し秘久し秘

兼 秘

中将 大舎中格
三男

弁 大舎弁
四男

侍従 中中格
五男

玉ふく腹の頼之の西子三人 兼

山つけて四位侍従

兼 秘

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 秘

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 秘

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 秘

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 秘

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 秘

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 秘

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 秘

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

兼 秘

兼 玉ふく腹の西子三人 兼

とすそせとそまう海那ま

秘

宰相

あまり実法が海那まをいそ

すうそまうけ梅乃初也

秘

あまうそまうそまうそ

くらそまうそまうそ

秘

あまうそまうそまうそ

色董

あまうそまうそまうそ

下りりあまうそまうそ

秘

あまうそまうそまうそ

あまうそまうそまうそ

秘

あまうそまうそまうそ

あまうそまうそまうそ

後

あまうそまうそまうそ

あまうそまうそまうそ

あまうそまうそまうそ

あまうそまうそまうそ

あまうそまうそまうそ

方此白梅ハ平素の根よりて折れ出
り又音の連ハ木つぎに枝よりハ地を
多くとも根本乃く折りハせまへはじ也
以上義ノ分注シ

河 杙コウ 廣韻云 樹無枝也

河 神秘 神ゆきてみまへり 不實あり也義

又より也と

秘 此よりハ人々ハ初也 齊

河 又より也音ハとありれと可ハ也也

等 其ハ神ゆきハ富ハ杙也

死 此ハ女居連の也 可ハ 又より也也

河 神ゆれて人々ハハ初ハ也

河 此ハ又より也といハ後達の也也

古今一角のそれハ初りてツクハ初ハ

其の初りハ又事ハ初ハ初ハ初ハ

て又ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

教ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

たりのまじ

つまがきれくおのてしきめふふいふし

まめんとしつげきさうたれさうた

若くさうさふれ 秘屈しうた

意のりのりういふまじ

あふしつ後あさまうまうまう

昇進とつまうさうさう人くまうまうまうまう

つたまうまうまうまうまうまう

あふれまうまうまうまうまう

どんがうまうまう

たのひの福ひまうまうまうまう

かまうまうまうまうまうまう

又まうまうまうまうまう

あふまうまうまうまうまう

似れまうまうまうまうまう

かのたわうまうまう

まうまうまうまうまうまう

まうまうまうまうまうまう

かゝる後めと

源氏乃事とるなりまふと

たしりてとるなりまふと

薫乃ちそとるなりまふと

けしとるなりまふと 河感とる

再三とるなりまふと 義 後倒の心は

あしりてとるなりまふと

侍従君まふ人の名紙

うりてとるなりまふと 義

かゝる後めと

すは物ありまふと

あしりてとるなりまふと 義

みまふと

あしりてとるなりまふと

あしりてとるなりまふと

あしりてとるなりまふと

あしりてとるなりまふと 義

あしりてとるなりまふと

花 紗

わらと同しき衣也 昇

まらりおかしき御しきあり

花よりいさだよりよきなり

花人少将の事

そらよりぬおちるなり

始君のしつこいふういあり

花人少将

志ん友のあしむて

紗 道より

くゆけや

紗 意のい

いとあつし

紗 花のあつし

梅くえん

梅 梅くえんよさわ

梅くえんよさわ

い雲ハゆりけ

はしき

秘 うちれ女房も也 昇 養

女の一ふてつらうれうさかか
あらせぬ頃

花 呂ハ淫々女を陰々進いさうりふあせ
ぬふあや又呂ハ双調也との新さうは
しりてトこあふあふりうさかか
あらせぬとさうりや

昇 松かここと合とぬとありあや

昇 呂ハ女小扇とぬと也 松は養あや

秘 心持さう事々女房よりいつさあさ
さあささささささささささささ
あさ 昇 ささささささささ

養 呂ハたろちちとてんかああああああ
可作まのお無あはさつつけさささ
あさあさ

ささあ痛人乃あささささささ
一明てりてあささささささ
と養のゆささささささ

ひらとにかくいまあり

^秘い比巴すくれらうりー東よなうり義

くみれりりて

^義源侍後花人あおむひよせりて

あんせぬと

^辨くわとあうーれ侍後とて

侍後乃君して

^秘あうーり侍後と義辨

故後仕乃ねとれつととに

^花葉ハ梅来乃子あうにりりて根又感

乃凡をとに似るうあや

^辨むろくのん乃君れ西子侍後して

つひおまうわりのつまとのぬちじ

大長小細うりと人乃ソひとにせふ

^義ゆーとととあうと

^義後仕大長薨乃義は後あてみ

是と雲隠卷の中乃事とあひ

うくひすあをさうりれ

兼

寄教誘川来花下

むろく瓜風のあけりにきく入てそ

管山をふ志えりりやふ

心よ河 兼石一及川方

流めくふ事やとあぬ瓜

つめくす人さとありて流めくす

——^{カシニ}めく入てつさそつめか

さとおぬとつめや

私流めくやとくらふらふ

けのみをそまろつじつひさり

兼

むろくれ文ちしむつひさり

むろくのそふにそそて流伝大

う渡まあのみそ

おの志あやしう故大納言

兼

柏木にあふと

兼玉ろつひの詞

きんくささ

向此

花人のおろし

うらすくし

秘 手 起 ころん とも あり とも

右 松 ころに あり とも あり

舞 是 之 能 乃 人 此 ころ け 返 あり
こころ 出 あり

月 どの

舞 画 紙 ころ あり

ころ ころ ころ ころ ころ

秘 花 言 吹 八 男 踏 舞 ころ あり ころ
祝 云 ころ ころ あり ころ ころ ころ

竹 川 と あり あり あり

河 井 川 あり ころ ころ 此 津 あり あり あり あり あり
と ころ あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

花 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

井 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

秘 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

うさぎ

ふいふとみていふはあふあふとつとまねを

酒頭奉心と云事れ 仔細天

いふりてゐい給うと

これこそ期とわねあふふ神れ

うけひす

荳ふとれ酒成辞——うさぎ

かふともとふとあうとまきて

細長と源徳後の君れ纏取小う

あう成うれい何れも世をてあう——此

徳後日うらわけていそ成あうさ

何事そつと成——あうとうますとと

さあ成辞——あうさ

わうとれとらうらうら

何のそつとあ——あうとれとわ成

う——うさの具とあうとあう——成後

ううわうらう

うさぎとあてううとれと

ふり成りて先て又ありては後
のりて後

しきやみりふけのり

水驛 此語踏奇不りふくめをり全
在り後

是ハ俗小す忠くくると事れん

ハ同のり

花 秘

水驛より初子れ巻よきり

市川ハ踏奇此時くふ音れんく

より前て下ふハやのり

大義とつり

昇

竹川ハ踏奇の時くふ音れん此

和竹川くふ音れんつりふじま

やめてこふハ音してふれまのり

あめりハ音して 追因云水驛ハ驛

流ハ後驛水驛とてあふ事とれん

流ハ後踏歌也とてありけ和竹川

とくハ踏歌ハ後て水驛

あはしとつうんハ方ーして曲とかなさゆ
水驛とハ跡かろりあれん也

ワカ思ハシルシモナキヲヨソテヤクイハル也

少将

昇 花人少将ろりろろりてろり

まろりハいろろろろろろ

笑 花人少将の白く

何 是と若く但ろろろろろ物えん

ろろれ白く

花人ハ 人ろれ白くハ成ろりナ

ひろりろろろろろろろろ

秘 今源徳後ハ白くろろろ

姫君の白くろろろろろ

我を中えれやろろ建ろろ

少将娘

と後人 ねろろろろろろろろ

ろろろろろろろろろろ

昇 女房の中ろろろろろろ

秘

中しつはくはぬくは心うつろく
女房の中よりよりゆきゆきとわく
とありれとみろりてむのあひひに
つりつ成るけすあそふかはははぬ
ふんどうはきくせは

羨

折ゆしつ情ととれもあふとせは
まゝとてわろりろりろり心ろりろり
あゝ地獄とせろりの音とありて
あそわろりれらあろりはあはれ

志の女房の中より漸く出さるる人

志の女房の中より

ふんどうとみろりろりかろり人

つり見まひきんと

秘

羨の又女房 羨昇

ふんどうとみろり

秘

あろりあそふかははぬ

あろりあそふか 羨昇

羨

あろりあそふかあそふかあそふか

心ありこゝちありこゝち

河扶新極

りくらくみのる海の時を竹川の

淵の足とりと又うりかき

大和玉宇它郡有并川の流く申是日記

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

院水ととくれ

善源乃山事

くくくくくくくくくくくくくくくく

善女とて

あの君をられ

秘 玉くくくの子とて

くくくくくくくくくくくくくくくく

翠

教侍後乃在事のよれしり

私けせといふおとれあしきしん

つしちまやといふりあふ

人の氷じりやとせん

源侍後乃人れあつまひんあや

しりあし

先和のりれあじりやあてしん

甲の如ひしんしんしんしん

也事小く也 翠

美

蕙れんぬ始君のいあしり心うき

しけすしすやうしんしんしん

氷じりやとしんしんしんしん

面しりて後分身く権し酔とま

しんしんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしんしん

赤川は私成あつしんしんしん

しんしんしんしんしんしんしん

我身と早下しんしんしんしん

也前侍

等

は川あちるひふれり初りり
まう

はしられなほ

等

人—きうぬあれぬ姫君ら
ら—ちつともあはは油のそ
わゆるしとん—り 等

十八九が

等

等

姫君中の君なれ事
姫君らり也

等

あひ姫君の事 云々姫君先才也
必十八と九と—は—の
ソり

等

あひ姫君一人—
よ—に—先才分明

等

等

中人の初はひあ君—
さ—あ—
年—

のけちとら

いま一とこら

中交之 昇

ありひやうあふまきいひとら

ありひやうあふまきいひとらあひの君いもうとら

竹後乃君けんきつとら 昇 始忌達乃

等見證之鞠をいひとら 友竹後

あふ君うらうらのとら

竹後の君此兄之 昇 中將奇君二人之

中將之氏人乃いひとら

後乃昔未達之 言津人いひとら

まつ人いひとれくして私乃とら

らりともいひとら

宮津人いひとら

遠めて竹後のあひとら

乃事之あひとら

奇官いひとら

まつ人いひとら

細く申すのりこころは也

私申すのりこころは也 弁官は政官よ
て毎日百積乃政よありの分職
のくくり

義

凡尚書郎管轄く任權衡職を
撰其人上象七星故也 云握蘭職也
私尚書郎はもとれりり弁官也

うら口よりふとまうりありとて

秘

兄 中將乃初也 昇

義

兄二人乃此より 但中將一人は
次平年のよりあり 一私中將も綱
ゆしてはれ

ふとれおりまうり

義

右殿を鬚とて

秘

内まのり乃事也 昇 義

七七八乃

秘

中將也

昇

韓志の息た近中將始焉とて兄

弁の事とてん也

中將の 一義あり弁とてん也

これ所ありて後とてん也

故後乃素意のこころにありてこと也

お中乃花の本とてん也

始君とらち行せしとてん也

とてん也

中將の事とてん也

始君とらちの行せしとてん也

あられんて昔あつとてん也

とてん也

とてん也

とてん也

とてん也

いとさへあるこのこととてん也

中將の事とてん也

かゝる花の本此何とてん也

の事とてん也

多うとのこくやそ中將ありつま
割一のこく極神の心こくやこく
さうらー事成さうらおん

いさくこれおんまらうりにくらふ

童稚悉成人園林半喬木 白氏文集

次小極乃け物のさうらひおん
ての席也

おもくせんさうらつて

父舞玉のさうら息のさうら物語

おんさうらおんさうら

人のむこはありて

中將乃事誰人のむこさうら

花よんさうら

おんさうらおんさうら 翠

おんさうらおんさうら

おんさうらおんさうら

何れつさうら

冷泉院のさうら

美

うんの志くはるやうに人れおやう
よりさあし給ふそとまふとよまて
弟子地也

松冷泉院のみくはるく
これより弟子地也

院

昇

院へまのり給ふん事ハ
或るくはるやうに兄弟をよのほく品今む
かほくまのりまのりはひくくはるやう
まのりあはにむくくはるやうに
神くはるやうに此まのりむく
后まのりまのり

おの志くはる

秘

兄弟くはる中將あは

あはれこれあはる花鳥のうめと福も
花紅葉と詩号爰経と時成ゆ
くが物くはる中將のむくくはる
詞へ 昇むくはるくはる
まのりまのり

心をお遠也

去又をいふかと

紆 中將かよのすまゝ

笑 よの初よりつゞきて中將のよしを
しりし西よりた事始てみたり

いふくしめりし人こそ乳交人の

紆 夕方の才一女の如しよ系流し

笑 玉ころりたを看て

夜ねりてしは

紆 盤を

のこまひいて

笑 玉ころり

中將かよらり給て

并 始よころりの先を

あつとひ給さるはけ物也

心 宋朝は王荊公といふ人鐘山あり

蘄秀文と其流の心梅詩一首也

賭とす秀文もけり不能作詩王荊公

代々作まらるゝあり後代の事ありはむ

と賭けする事ありあはれいふ事ありや

むすむ王薊云々事といひたり奥ありて

又宇治の菊成りけ物もすくもりもあり

すく一ひらり流るん

三番目二番目らるる事あり

新成りせんと

楊木成りる事んと是姉妹の事なり

連い乃女物

花人が物にあたり此侍後の事なり

己らり

花人少将也何なり乃侍後の事なり

きりに兄弟もつ事なりみかおらる事

うらつ事

侍後とも申す事君のうらつ事

かき事

ゆき事此あやも

秘あひ事

花

あひまゝいさくくろりりかゝるはなはな

ツツリ

あひまゝの衣裳前よりかゝるはなはな
と見ゆきつとくもり

まにちりおん後のさみり

桜あかり衣かゝるはなはな

ちりおん後のさみり

笑川びつ

たささね

いさよの志勝り

こゆらんゆくとりや

花の藤あひまゝの競馬をくはと勝り言ふ礼教
と十進ハたさせりふりてくもり

高藤の志く競馬乃時志は勝り

こまの志は十とせりふりてくもり

きりりりりり

高藤礼教 高藤あひまゝの物あひまゝ

あまの志は十とせりふりて

昇

あはれおしんふらいつのうらみのさびしき

つとむ心

養

妹の志はさきよりしり此志乃をもみ給

ふらにありつづむのまらう成たの

あひまのつれぬ競らありせと道

理よ海へ渡して今春もうらむら今

志此方の人ともや——

昇

花の本はつらつらうらたあをれとて秋もと
とふんしれしりききとさう

あはれおしんふらいつのうらみのさびしき

梯乃本、二女あり西にありしはあつと始

のた本よりけりけりてうらむらむら

つらつそ西の西にうらむらむら

かみ事し志し妹と

紅

花人のおの心

うらむけりむらむらむらあやとさえ

そのいぬ

少将の心はうらむらむら

又く事りやと

昇後こののく花人少お入もせくやと
ういひしと

是より以後の事

君より花のおく

婚素より

中けり此婚素

婦君 暮よりと後の事

はくく風よんりくうれあうま

たはたのみく

おひらりる花いあんとそのうい

と女親身あうく人あふはり

人くはふんあくまはうては

流とりてあきん かわ内侍

お人ともうれいあや

あうくはる花りけあふれ

此は幸ねの君

あひあはり

私あうて見いさういもあうあ

のあはりあうにうまうあうあ

筆おと

忘とさう日人如へ

さくともて何のちりやわが花あはれ

まじきとあまうみ

世成新しう

嘆とあへすちり

と足ぬと恨あり

さあしきとくれ

非君小言人

右乃むあ君

妹中君

世よちか

うと成

枝あり

まけ

世回あれ

こた

風よ世のちり

こころ

あふ人のちんくみせ

私共の宰相君れうくくくくくくく

わうくくくくくくくくくくくくく

てうくくくく

これ所々の大捕の君

中君勝方の人

ふありて池のみさくくくくくく

あふくくくくくくくくくくく

枝りりともあふくくくくくく

あてと水乃あふくくくくく

おふくくくくくくくくくくく

とれりおとれりおとれりおとれり

云界よちふくくくくくくく

方ハスーくくくくくくくく

くくくくくくく

右のまれさ 剛云

姫君のまろくくく

橋くくくくくくくくくくく

おのりくりに此神ありやと

秘 神のありやうりくりにあはれんは美^昇

大なるにわたりりの神に

まきくくわ風よまき

心せしけあしそ尺指あまといおとす

た 落すく下まき

おのりくりに心せりと負方りち方

とつひくくくく

とつひくくくく

秘 中人の考れよの物よ乃句成りく

しんはれおのりくりにあはれんは美

つりてくくくく

こ考くは考の文音は天下へ押出るひ

あまきよは敬くくく

本とくくく

私志くくく

みく

かくくくく

紐 じく〜して婚忌し〜るむけりて

女御 うとく〜

紐 女一宮の母女御 弘徽女也〜

紐 我じり〜るま〜

紐 冷泉院の西御弘子女御の〜

并 右よむろの福んあふと信り〜

并 むろの先身此冷泉院の女御よりむ

ろ〜れま〜

私是の弘徽女御よりむろの御ひつ

り〜詞人

女御白〜やうと〜り〜

ゆ〜や〜むろ〜女御と珠を命〜

す〜や〜冷泉院の女御の〜

むけり〜る〜

人〜る〜

紐 冷泉院の女御とあけ〜

女御も〜

筆 ち〜く〜

とうそひ達忠と也

所々人みわたり

義

むろりの心定まらぬ宿世めてこいと也

とく水のこゑと

義

義人おのの母を升取らむろく此世の

みあひこ

いとわらわらうと

秘

雲の宿の又此詞 義 昇 玉ろく此世に

おろりたることあり

人のみくろふとめれと回事と也

義

やそ始末此事ゆてもろく知れ也 昇

くろしあうと

秘

むろりの心 義

いれふ事とていふ人さうと

秘

玉はろりたる中此詞 昇 義

ちあやうけふはあ

義

志実此志あり也

これ水もろりて

兼 仙洞へ女湯ありの事 松葉池のほとり

兼 さうありせし

兼 姉妹乃志とらと一衣ありつせ流る
る外少しと留しとわと

秘 松とこきとにしとつとくともあり

いりつと志ありとつとくともあり

兼 中流とがす

兼 院へ山あり此流定すり云

兼 侍後乃流しに

兼 飛人少将とらと此侍後の流し

いりつと

うとらとらに

兼 奪取

兼 多世成りつと

又乃とら

兼 流とらとらと月日とらと

兼 多のうとらとらと

兼 西の宮とらとらと

喜此日教のうらうらゆい由にいかさあ
ぬらよとや喜の言をり事し下此
の姫君成ゆいしあそつ建る月
月のさうにた建るうあふ成院(西東
のういあひのをれそらり此あそく
あれい物うあそくまそらり

人をかすそのまわり

か将乃白く

あつた又折とあそく

か人のあはれて

傍あ例の事とあそく

まいろうぬ中おのあそく

姫君たあ唇あおめ又かとりり

あつ人

あれ也事とんとそ

差乃又あらりてあつた言へ侍は乃

ゆ成あ人あおのあそく

うんまあうりあそく

人月の夜おきけしきく後いふをわらふ
面うらん

秘

月方未劫うけくはふきし事とらぬし
つふふそちうきかひんうりたる 心

い方たんかへし花鳥ぬたてりわかれ
そふふしの方とむきり 兼

兼

うきしきふきし事との方とてぬれ
ふみ屋人ふきし事と

ふみ屋人ふきし事と

秘

うや事ゆさまりうきあはれいし

兼

中将のむしれい

花いりしよの姫君のゆく人かぬみひりうよ
つふふのうきうきし事と

かくさめゆらんゆさゆ

秘

中姫君ととつ事と 兼

けふかの夕音のをんそくたりきんよ

秘

源院 あはうき 見證 伊勢物語志名本 兼

中納のむしりのむしきうらうら時わ

くよあへて見たりしふいりし世よ

んうけりしゆしきとあやせ

花

竹後君は西春の足元きく夕音より
くまらしくあやしくに加ふるくくくは
海よあつひよみし事よんり 私むき
兼あや 秘よ義絶へー

さうしめせしめ

秘

中持の云くのそめ絶くくむく
しめしめ

并

中持 むらさきの女房 の絶くくそめ人かめくく

じひ火つくかこれ絶

んくくしめつるくせめ

兼

絶くくおしめつるくせめらりこ
ろくしめくくはくくし中めの絶
のうみかめく

じひ火つくく

向

白糖 早死人のくくくくくく
くれぬくくくくくくくくくく
くくく

花

火のつきくくくくくくくくくく

じつこのかあすはつはひかよ
きくく人か腹ふとこあさよ又腹
とんてくれ人のこもておこ
皮言り火のつこくはあおこり
又火つくれは言を云中後りう非代
るく人かひひのうけ我と又腹
いり也すとくひあつせり

ねは申おのわはる人かおの
申とむ極る理れとてます
かきゆくさつおののささて
事とかおのこはよとたから
そそくじひあつては

そわさくれや
美人かおの
あつてあまを
うしあてさう

たつふりつれて
常のいおれく
かまをわくあめ

る南にんをこし心く助をふとすん
りしと也

身 皮にたと云ふ也 身 おろしうの紙ト云也

義目隠使 二下云也如し

りくせにんまうし海しん

花 けりしにんまうし海しん

身 けりしにんまうし海しん

身 けりしにんまうし海しん

こよまうし海しん

幸れ外よりんく云也

そわふそ教あぬ君よかかこぬら

人しもまうしにんまうし海しん

秘 冷泉地人まうし海しん

身 けりしにんまうし海しん

まけしにんまうし海しん

教あぬ君よかかこぬら

中持切し けりしにんまうし海しん

んにんまうし海しん

6

田基の好も強弱よりりて多き
勝劣あれはありとんよふり
ととふりあり

秘

文のふもせうせうと助を曲あり
まうしあり

策

一切の勝負ありつうき人のあ
ゆあれは足能のふもせうせう
トふりよまうとふり南のあて
ふん事の時あり

清のりけり

策

女将のふ

又意人があ

あゆまうとふり

ふり南のふり

6

春のふり

秘

昇

少将のふり
飛人の将ふり
飛人の将ふり

箋

上の初よりと、いふは、ついでに、
うさこ、ゆりも、あつと、かく、むね、
ふむ、い、姫君の、う、あ、い、定、り、と、あ、り、ん、日、
か、将の、命、に、限、と、さ、う、さ、り、統、と、の、奉、
の上、に、お、り、ら、る、は、遠、愛、し、て、さ、は、ら、る、
幸、り、あ、り、ら、る、の、こ、と、く、い、地、人、の、事、今、も、
所、遠、を、あ、り、い、家、の、忽、と、蘇、生、と、い、
く、は、女、将、の、生、死、の、姫、君、に、進、退、
あ、か、う、と、也

又乃日卯月義

卯月一日義事々

平義存義家義と義良義

内義は、あ、り、さ、は、ら、る

卯月一日の旬な、平、存、あり、か、あ、の、
先、才、と、ら、此、名、は、あ、内、

と、さ、ら、ら、り、て

義、人、少、将、の、さ、は、ら、る

母、水、の、こ、と、あ、り、さ、く、み、て

平、升、の、存、

松崎と

夕音事々

院のさうしめさん

冷泉院

かぬのふれひけり

松崎

新んころよ

きよみ新んはては心通すれは後日

あかりこころと云類れ

あいらんのはりあ

正月一日は信令しは時がゆ

くさひまを志しあれらよ

買物と云

あいらんはゆき

夕音はまよるむうしは回

てふけりし物ゆは後梅也

さきまの

あいらんはまよるむうしは回

あけさたむねのトコトモトク
花のらうこそ、あけさのひけま
しんまきり後城うまうく
所ありれらつせい

御けさ人のさむく

あつ花人がおの介あそふ人

中将のおしつに

^秘まよありて方れおしつに

しつにさむのト積りしに

あつすおられらさむと中将の

あやせ

^昇しつにふのあそ女将のちよひ

いふれせも後つにいと

さむしつにけうりてしに

しつにまきりあつあつ

あつあつあつ

おしつに

^笑夕音あつあつ

どういふありて

秘 中絶息とて 養

めさす海一交事

養 及いあふり中とて 幸ト白シキル

かきりたきりあてて

養 松上此人をよひつ小橋園家うりて

后下にいゆすまうしきん況やきん

とわと也 あつりの華族あつり
舞止れ素とよき人

ありとこれ所を

秘 松上えてまはくしにりき

せびり せよしはて成るりむり守りてさあて

むしあつ海とつしきりて

秘 中將のありの義人がおろせりい

あつれあひあつりてしきりて

あつりよる成るあつりあててあつり

のこりあつりてしきり

秘 せよしはてしきりあつりて

そあつりてしきり

秘

公界小より始りてソリ以前より人の
くは多きをあるとそり初めれしてより
少将志成らうればそりてわらじかんと
之よりいむにむは執心のゆゑにうと今
日始りて志りけりてそりおぼしむ

美

あれしと行

秘

侍の人より

かき入らむ

不書改

九日よきつらまふ

16

蘇黑大臣大君春入冷泉院四月九日

太上天皇納妃例

寛平法皇以京極御息所為妃

九大下
時平女

秘

四月九日之御つらの嫡女院の女御よま

りうまよ京極御息所例に

昇

右乃大女

秘

夕吾むらうと兄弟らうれりて

昇

水のしそ

秘

雲井傳之 昇美

秘 物のみかたぬ
昇

源少将 夕寄六男後武中内
母友典侍

義 難役 同七男四位少母母の母
母人若原下権中一人

上古の拾圓の子古し難役と勲者中

中古の東を代わむて大長以上此子孫也

とほりあすけゆらうい上古乃義之

大納言重よりと

秘 印梅大長之 昇

小此ころる

秘 此姫君ハ中納言の妻と前後此兄弟之

中納言ハまろしきれ如也

義 印梅少将の難忌此嫡女栲栲乃君之

母印つて父印母 中今院(まろしきれ如也) 此姫君ハ

前後の兄弟之 印梅とむらうと兄弟之

いひころるまろしきれ如也

後中納言也

難忌の息栲栲乃腹乃兄弟之志也

その詞ハ同し兄弟之れ音信ハ始

いさろ紙ろう 昇 巻

夜のおをせまうは

紬 人くろい

まいあうりつん

紬 妹うー中將のおしと 花

いさほりきりともるう家

花人少おの又り初

りそりりてくれし

中おのおしと也

心まにーと

姫若れおられと

このおやー乃まひー

昇 姫若られ又乃の中紙さひお

朽あられし

紬 内まらうおとれし

おらうこれさうりきらあひて

紬 け花人少お父母お果しといり人

めてゆる紙さうりきりあてとあ紙

かゝる言はすもはあやふしき事
故にあらせしむるにあらざらん
ふんじの感しむる心もあやふし
向ふ 兼 昇

先 是の義人が將の行や二人とて

かきうしあり候

秘 主人の望はくはうしとるひはりし

ありし初成り

これ又ありしに

兼 女將の文みし

始末 あつれふき好くぬせれしとては

人 かりかゝるものは

秘 おかめきうりうし命れしとて

向てか入て世のあられしとてあ

らむとてかゝる人よひはり

物とてあつれし

兼 杉かめきうりうし

兼 あつれしとてこの物とて

つら

ゆーつゝたて

花 世に常なる此事とありてゆやん

花 いまはつらりとありて初とつら

かひを造りし

花 中将りのもの

やそそそつら

花 その中へおのめく人やおと

つらつらつら

花 おのめ

おつとつら

花 今迄くまう始とつら

私時節の感とくそつら

わくらのつら

つら

花 やそそつら

あつたつら

花 あつかうつら

はのたつたつら

さよあつあつ事ふか
私此言を面仰

此の如くもとけりて

史記曰季札之初使北過徐君好季札
劍口不敢言季札心知之為使上國未獻
還至徐君之已死於是乃解一室劍繫之
徐君塚樹而去從者曰徐君已死尚誰与
季季札曰不然始吾心已許之豈以死倍
五心乎

吳世家

季札の事之河海にやるる 豈以死倍

吾心乎ト云語の意成り

如君の如くはゆりてのまゝ 尚さ

さし少の死後也と季札の

情をわたりて成るる也

此の如くもとけりて

季札の死後よりして

久しきは死して

て成るる也

うきとていふこと

糸 姫君乃白く

又少将の文あり成姫君はみかへ

かき入てなうつらん

糸 此あつてあすしてなうつらん

おれり

糸 此はさくくのん

中女御の白く

糸 おろくは兄弟の女御也

ふみまのり

糸 冷白流し

后女御

糸 后、枯好く 女御、玉うつれい

あつて

糸 流乃白く

明人の白く

糸 玉うつれ

心とて

玉ろく此院小逗るにあまし
冷泉乃てそよそ

口行心うし

秘池の所心

源侍後の君

あつて

院のうらり

冷泉乃院中小蓋小しりしとよ

とあり

こた所心

秘舞王の姫君心

あつていかにんあつて

玉ろく此所心い姫君心

くみ心

あつてい人の心あつて

みの所心

秘今世心

秘あつていあつてい花松心

ゆゑに南をあらはししる

兼初んらうり可れさぬこ

兼ハ兄弟此事とさういふ心よら

せらうりしと也 兼

兼あたらうるあて

兼侍従の兼あはらうりて兼あて

兼侍従の父あはらうりて

兼侍従もあらうりて

いと心まらふか

兼兼れ心 兼兼

兼かみ侍り

兼志士の初又あはらうり兼あて

兼兼人少将いしとあはらうり中に兼あて

兼あて

兼あて

兼兼将中の兼あて

兼兼夕寄兼兼初存の兼あて

兼兼中兼兼あて

よき合のやうな事

子てや志しん

あは中将のころがゆあり今も

あはらる

おひしるこことあて

おひしるこことあて 美

かんの志成りあ

あんの君りや也

いさやきしるにしるあし

おひしるこことあて 美

けさか事しあはん女御しりあ

ころの始しあて

あはらる

あはらる 美

あはらる 美

あはらる 美

あはらる 美

あはらる 美

昇
皇女将のり

あれと所々つゝみふこゝとるはと

秘
美玉ろくろの詞

秘
宿世ろくろの詞

うたじろくろの詞とせと

秘
中約の詞

秘
宿世ろくろの詞とせと

一の縁、遠く身放るといふ事

ろくろの詞

中宮とろくろの詞とせと

明心の中とせとろくろの詞とせと

女流の詞とせとろくろの詞とせと

あつとせと

ろくろの詞とせと

昇
院乃女流の詞とせと

秘
ろくろの詞とせと

秘
今の女流の詞とせと

中宮の詞とせと

君より所よりまづかひ

義

まゝおの事早とつめ事こそ是を御位
の事と流る心より人さる成り

女侍のつらうたふ事此

義

二とくぬるに女侍と姫君との間
ふらぬ事出来ぬ外中へ
うあんと也

少くもして中給へ

心

中将と弁の君と也 義

中約と弁と也むろく此子也 弁

心

少かひよりたはれおひ

弁又是よりいへり 心

心

あまより冷泉院乃所籍此もされ
あはれなり

あまよりいへり 心

心

養人あはれなり 心

いへり 心

菓子地 義 秘昇ノ義ヲ尋ルル人

得後もけちり

并 薫く冷泉院よりその

梅りえよありせし中將のありし

秘 梅りえよありし時和琴と云ふ

女房 並

正月十日梅りえよありし時和琴

にきし女房十九へは花人がの妹ト云ふ

詞二人と云ふは中將よりト也 花人がの事ト

一りば中將の君トトニヤ

あはれあはれと云ふなり

義 ありしなり

うれと云ふなり

義 又一年へ

おとこたちと云ふなり

男踏歌 正月十四日

正月十四日式目へ

天武天皇三年正月拜朝大極重詔男女

元別圖夜有踏奇事

天保十四年正月十六日御大安殿宴群臣

琴歌曰新年始述何久社佐奉良米可

代摩提丹

朝野僉載元亮撰正月十五日六日月時京

中十一女踏歌

國史云天保六年在初子卷

天慶三年正月十四日踏歌舞人菊麿持袋

丸の監伴有時以上丸近衛大石富門

垂纓著衣袍淺沓

反上人乃多入も此中に

前六七日お湯前被撰定歌以下裏持

以上人々行列次第亦甚後お中院習礼三交

一日於中院試系

四位乃侍後右此如也

右歌頭お劫

右のくさ 一本歌頭人

奇頭六人袷法与子深袷各一領

奇掌以下御人以上女子深衣各一條
樂人九人各襖一領

十四日九月 式日

所前よりいそ、冷泉院へ

并 所せんよりハ内より之

延在十五正十四踏奇系下尚侍并一親王

宿可未

よやまふと

秘 所此始君より一先て又まふと

右の太極致仕の太極此とていふれて

秘 夕寄致仕太極の外此人いふと也 并

太極院と

并 冷泉院物の上よりあてたりしす

秘 冷泉院也

見よりんとより御りて

秘 始此太極之妻といふはひりて

よこ花と

秘 綿よりむ成はくまうりて

事入

躑躅フナトシの花ハ綿入

八日被定躑躅フナトシのハ内務寮可奉始綿

尤始細屯綿一連祿新綿十連綿花

新綿二屯糸三兩調進ハ仲綿花綿

給作物ハ令削繕ハた出ハ官人枝ハ五枝

進ハ之ハ終ハ美日綿花ハ枝ハ付ハ元

竹川ハいハてハみるハ此ハなりハた

去年正月乃事成ハ之ハり

内裡ハめてハ此ハ後ハ綿ハ内務寮ハなりハり

出ハすハ内務ハ女ハ花ハ人ハとハ内務ハのハ人ハめてハる

飲ハ酒ハとハ階ハ小ハのハりハてハけハるハ又ハ次ハのハ令

よハ五ハ位ハ花ハ人ハ庭ハ上ハめてハるハ又ハりハりハ庭

よハ綿ハとハつハとハ花ハ入ハのハ袋ハりハりハふハと

又ハ多ハし

先ハ奈ハ調ハ子ハ躑ハ躅ハ言ハ吹ハ奏ハ祝ハ詞ハ

囊ハ持ハ計ハ綿ハ奏ハ絹ハ鴨ハ此ハ殿ハ曲ハ着ハ座ハ官ハ

弦ハ酒ハ肴ハ饌ハ吹ハ調ハ子ハ唱ハ竹ハ川ハ曲ハ即ハ立

座列立 如前歌日唱ノ後舞人双舞
内侍二人分被綿止舞且退彈和琴自卷中出
奏我家曲退出

色あしりのふかき

友侍後と赤川うまひ

舞人女将の心正月十日此夜乃舞事

ひうこしもしいひるくあきさく

舞此はあきまつひもあはれぬさゆか

かきくや 秘冷泉院へ

ささいあま

明心申あま けきある 秋好

秋好の心さあて冷泉と西人十人

むしりとのことあきあ

舞人女将よとりつさ酒成志のさゆ

とあひわくたうさし

女将の心これおめてあきり

踏音小飯舞あり 水舞、酒肴あり

地あきありていさま

薫く冷泉流のり〜お多々

此節此事も

内裡ゆて乃作法と冷泉流此尋子

さう〜めすく

か〜い〜ら〜る〜人

秘 流の作也所自是乃四詞之

并 手すさ〜ら〜人〜と〜是薫此方以と

ん〜ら〜

むんすんら〜と

秘 百春系 踏歌曲 勅初巻

并 踏歌小〜不踏歌小ハ我家此後百春

系あや〜とけ回〜 同云百春系と踏

系の人乃小春百春系と云や

一音百春系正説

ワ〜の〜と〜ら〜

秘 薫く都さ〜と〜り〜あ〜ん〜と〜乃〜也

一秋の月けい

秘 踏奇乃夜此後之 并

花人の少将此月乃光小可やさうらう
さとしらるれをよるのちあつちや
をれよらうてらうとみくさうり

花
花人が将院していおよみくさうの桂のり
もつ事れらうとみくさうの舞ふは始
の着中めて足指しあてをいの上
めていさうとみくさうり

釈
祇云女将カタチヨキ人之サレト桂ノカケニ侍ニ
アラスヤトハ桂男ニ非スヤト云心之云ノ上近

テハサレモ見エサリキトイハル其心見エタリ
私云ぬさ意ノイハル女将ツイヒツトスヤウニキユエ
タリサニハるハアラスカタチノヨキ人サハサホト
所前ノ月ニハケツサレタシハヒシテサレハハヒタ十
キトノ早下也

女将養男之月ノ影ニテハ桂男氏イフヘキシ
院中ニハサホトハ見エサリモ雲上チカクテハトイ
ハル其心之又云桂ノ影ニハツルトハ桂男事
サヤウニ見エヌラント思フニサモアラスヤトウタカ

ヒタルヤウノ詞ハ

又云雲上ツ内裡ニシテ冷泉院ニテ八月ハ夕
テ十ク見シハ宮ス所ノツハシニスハ心ツハハ
ありし一ヤト也

松雪の上ちくくして此院中を此院ノ院
してみしとみさるもみしゆりしとけとす
シヌルニヤト也

又説院中も月中のくくさるハこゝに桂
男丸丸とぬつさるさるとみしゆりしとさる

くあけくひつひと海観ハ 以上并

松
くあけくひつひと海観ハ

少将義男と此の極男也と云ふ事也
ハあるれと此院中を此院ノ院とみ
えんけくさるれとさる也

松
松雪の上ちくくハ院ノ院
松院人少抱ハ義男也ハ桂男也と云ふ

ありあつすやと云ふん月此光ハ明ヤ

と也されしも言れど人らくは流中めてい
うしとみしひけとされうしとつあや
大略らる事おされいと昔ははる地也り
あられとさくともあり

むろくは女流よさあぬ今も又藤人
女将の中さうきし申将力なりと
ふとあつし

屋いのあやち終と月よころい

いまいのあやちはあやち梅花多と

みころやちうい

花
月くくハ月華へ。今葉をれを意

の事とふ多しとく終るをい
乃の月くくハ花の多此月よころい
て今一しかみおありとほりう約
か将の事とさうしと終りて意の
いおし

好
月くくハ月よころい

昇
屋のあやちとさうしと終りて意の

初々此事しつじか

スカシテハ

私云ヤホレノ忍ノハレツナリ

サメテ云ツスカストハ云孔 萱ツホメテ此

云ハナクカレ義也

卷中女房弁

竹川のそれよのこゑるりや志あふら

つれやいふまれと

紐

昔あそび事思ふりり此ハ早ト

ころ初也 美

弁

そ夜よの正月よあそび事梅うえり

ふいー此事思ふりハ早トの初也

かみくまうか

紐

あくあふあやろれき事とあふ

涙乃かひあふ也 弁

七萱

あれてのあはれし如くハ早トハ

世らう此物とあふ志りあふ

弁

萱弁

紐

萱乃あそび何ゆとそれしゆのし

しくあふりた初末也

兼

ふ世のふれぬのじり此後と流る
わ成りり

人乃やうあといひ流るる

秘

女将乃やうあとい

うら出まきりこころ

秘

意のゆき

兼

兼

董乃初大

松は兼流る

あかこころ

秘

こころをりともいへ

あかこめとやう

秘

院乃西へ

兼

兼

冷泉院北西前

私をいやす家のこころをり
冷泉院

御前より

こころを院乃

秘

院乃董より

私たり此あこころ正月十日

秘

院の董より

女々々あそびひさしきまふりたり
るるいとあこれおとくううま

死
女樂の事々

昇
初子此巻に後宴に女系とて樂意

うしうう出し始しきてあつとも

うぬと今あつともあつとも

秘
右にわくく夕音の初子あそび女系あつ

事い多しうあつともあつとも

うみかきり

養
い後宴事初巻にわあつとも

あそび物に不見いあつとも後宴事

分明にんてり 元後宴に二三月に

い事あり

いさしきやすき

昇
華の四やすき舞臺の始君

いんる

昇
意持後

いんるといせまふ

昇 冷泉院のひるせり

おの廣あしあそひま

此殿

踏歌のうさうせあり

ふもと下の山とのひ

蒸のこりて安しありは海さうり

院のくくとくせりつた

昇

うさうの物

おの付物こく此物曲 楽曲 昇

号いつけ物こくこの物曲物く大曲

かさつりさおりしと行ふ

下子地く 美田いある蒸此中

風書あし安治よつとて後

る解りま

るかお家おらりおかこれとよれつ

けとぬす

義
兼光院の西子れがしめしむるに
事柄のさし

これあふりて

義
ちとて行通とくひにむくふあふか
進くは根を始りての事なるを
続たる

ありくよつあてしめしむるに

義
物乃より毎よかへし院の西子
乃事れはよし人作りて成す

ありて

いとおやきんあふりて

義
文も亦の西子のうちめ何とぞ思ひん
あふりて ねあふりて

あふりていふよ地なるに

卯月々婚文じしれ給り

義
あふりて喜りあてしめしむるに
七月よりは懐妊 秘昇

院乃西子りてさよあふりて

世中しくついでにたてつくは

いと多んとすん

引此方 昇

らへてさゆいひまふ

林奴中宮弘徽女御

四よのまのこ

姫君此院へまゐり給ふ事お氣を

あへて

おわげさばあてまゝらりせ

此以下中姫君の事云役とせそ

まうんとて讓任あは

おわをいとしりしあまのりたりまれの

おまの難とおわげのあまのりたり

尚侍の重職也これのまのりとも辞ん

とそりされとそりまのりたりて

ゆり給ひまのりたりと今讓任

あま也 昇

こむら此のふ成おわりて

養

内々御子の中を成るやうに女官を多しす人之内
存ありしは

秘

御子の御世の事あれと女官をいさ
とまぬへしとて讓任ありて御子も
當代の始れ固白めても他よとこれ
よりさへ一いさなりたるとせあ

ゆと也

ひさしかりもまふじうこれまいかた

秘

以尚侍讓子例と勅

養

旧例と勅て讓任し給て親子お續

の例おまらせりしとていさあはり

これ系の由すくせめて

秘

中非君内侍のまに成りあつとすく
せのあまのあやうしてらまふ人か
くそむろくは禰退とと捨御し給
しよりつんと也 昇養

内々みと一と

尚侍も中系のより給て禁中も御能
ありて給へんと也

は首書ノ

上キレヤ

昇

の職と

つと例と

尚侍と

へとも

云尚侍と

よと養も

つと例

ヤ

は例と

元張と

の代り

うと女

かどや

つと例

よと

女将の事とくはれこの

花人がおの事とせ井の如ひ

一書

年の暮してふうつら秘一書

むろ秘つら

大申弁と使めて夕音秘一書

一書

内秘りかふおわせ事

むろ秘つら夕音一書

さゆ秘くはあれらあふ

流や又内秘あふ女君一書

ハ物こはあふの如きといふ

内秘はあふ一書

夕音の事秘一書

大やをこはつせとまつら一書

云秘役をこはつけても言はら秘一書

云秘役はあふ一書

一書

内侍司の女官如左より

松倉女御等と云ふ籍をかくゆらんを

職へ尚侍と云ふ女官とて之職より

より云後あまのくくふくをよと。籍氏

よりゆりの各別へ

又此多しの中文のみきりごとりて

秘 昇 明石中宮へ

明石へいひの院ありての女御等

をいひてゆりより

木くおんせまり

秘

翰志の事と云ふ

昇

源氏のくせをかくてむらさき

をいひてゆり追後と云ふ事

いかに翰志

筆

翰志の存生ありて人の追後

よりいひて

をいひてゆり

筆

中宮と云ふ事と云ふ事

あゝのまゝいゝうらかた

秘 主上れ御心

美 文と名の義人のまゝいゝうらかた

もいゝうらかた

中まとの介まそりせも妹の志

とそりせがうらかた

んかたやうらかた

うらかのりんれ君

秘 内侍のまゝ譲任あまうらかた

美 字とくろくま

美 まろく出家の志は事

かゝるまあけい

秘 姫君うらせ 美

君うらせ

中將弁君か

うらま時

内侍のまゝ御心

院うらま

秘 浣乃内けさうの 昇

いせんとあるそり

秘 冷泉院のゆけまわす

かろけらるおわしーのこまりに

秘 若代々婚書成る後つる

男いーるあつてさて

秘 けしめて自然乃勢ともそい印字の

惜也

しりいこまらりと

秘 義 忌之燈之 義 昇 同 花同

秘 浣のゆいけまわす衣素始りぬと

文す衣いあろりーぬらりぬと

つる

まれとじりーるこね

秘 文す衣のつえ 昇と女内母成る

せろつれ衣中と衣と

秘 かんの手いり君成

秘 せろつれ衣中衣と衣と

心とせ流しと也 昇

ゆかめりしとありに

兼

冷泉流のまはり此上流のまはり 年
初ひまらふありむらうとせうとせう
ありし

又流中大い進みしやうありぬと也 心裡
ついでひそとあり流とありぬと也

うらめしうい

兼

文とせ流しと也

心とありて又たせしむ

兼

ありて年流ありしとせう 昇

意の宰相中将の回加し

兼

より宮内廷中へ け年此何とせ流し

て勅令

上件し兼並の巻しとせ流しとせう
わけらうの儀此流しとせ流し

心とありてかきうあり

兼

院のみと 冷泉也

あはまゝとけ

^等今夜正誕生のまゝと

女一文とつらりあるま

弘徹友の女と

女はもあまりのつらりあるま

^等水鏡記のつらりあるま

と女一文とつらりあるま

正感光のつらりあるま

まゝとつらりあるま

あは

世は

^秘世はあまのつらりあるま

つらりあるま

つらりあるま

^等結好と弘中友との二人道理

つらりあるま

つらりあるま

中将弁

うらやまのまじり

まじりのなかへ

まじりたまふいふあきて

まじりもかくすくれいら幸れあつて

まじり人のあましきまじり

あけくく

あけくくあましきまじり

あけくく

まじりくくあましき

あましきあましきあましきあましき

あましきあましきあましき

あましきのあましき

あましきあましき

あましきあましきあましき

あましきあましきあましきあましき

あましきあましきあましきあましき

あましきあましきあましきあましき

あましきあましきあましきあましき

宰相の中納言と白やうのり

秘 白文の妻は嘉十九のり宰相

義 かくらう 昇

白文妻と同時とんそくあやうのり

と同時何より史記筆法これ

御ん秘 かくらうち

あやうのり秘 あやうのり

史記筆法これ

ひねくち

義 かくらう秘 あやうのり

少納言と三位中納言と

秘 義人少納言

かくらうあやうのり

義 後進の志うやうのり

あやうのり

うやうのり

秘 流中かくらう

義 流中かくらう

すんき成と文

は中納言頼朝のいそ先てしんさす

秘 義人少納言りし人 三位中将昇義

大右衛門の西むすめはえりま

秘 平川のたまたま系為た人昇

秘 竹川たまたま事始てあし

秘 氏族不明

みられりてあし

秘 始末不明けり昇

河

東海乃みらのいそりひり帯此
かこりりともあくとそと

秘 昇 義 川 び 号

富すのやまける此

秘 院中乃折所知加

うちれさみの中り

秘 内納のそと 昇義

たまたま世まひ

秘 昇 平 河 昇

秘 ありりるる

右のたよ

秘 又若此右大臣たる大臣よりりるる

等 亦川た大臣薨のり若右のりた博ス

右大臣言た大将けりるる右大臣よ

ありりるる

秘 河海右大臣言のり九条右丞相たる

等 とひりるる尤奥あふ事

秘 右梅按察大臣言大臣大将けり

秘 右梅右大臣称右大臣言事

貫之集云天慶六年正月右大臣言の

りてりるるりるるりるるりるる

と 吹風も少とけりるる

九条右丞相と右大臣言のりり執

柄次男加りり右大臣りる事あはれり

義載

河 国史云右大臣従二位藤原朝臣三守

阿波守従五位上真作中五子之三守早入

大子受習五經

歷文章生人任大后并大將例付轉凡大后

菅家

貞觀四年五月七日補文章生九年

日得業生十一年三月對策及第十八

四月一日待從自余中央畧

寬平五年二月十六日任參議元式了控大補從四位下

同七年任中納言叙從三位九年六月十九日

任權大納言兼右近衛大將昌泰二年

十四日任右大臣右將如元五十六

為原道明号山并右將

寬平三年補文章生延和十三年正月廿六日

任中納言同四月十五日兼右近衛大將

藤原在衛栗田后大后

延和十三年五月日補文章生十八年十二月

九日得業生對策及才中央略安和二年三

月廿六日任右大臣七十七

い前まし
出云クイシヤク
ウタイハ儒
業ノ名

天禄元年正月七日轉左大臣

兼中將檢本秋自宰相中將任中納言仍
以兼左權本同時節也

此乃中納言也

兼中納言の事 紅梅卷よりある

あり等

紅梅の事也兼と源中納言とあり

は平川の巻昇進の日時如く一巻

に混雜の事なりはる

私云並卷と一人く列傳よりこれ

の記混雜の事なりはるはるはる

當流用

此位の君の宰相初よりして

兼此位是之位中將宰相よりあり

此乃中納言なり

皆夕音此一族也

此乃二名の事なりはるはるありて

夕音紅梅大臣兼中納言なり也トあり

松三女心トニツコウノ字あり 従はれり
ゆへー 御梅と 薫し 暗夕音と ちりき
ゆりあまの 薫し 夕音と 波仕古
の一族と けい 御人

中納言れりこふ

^美 薫之 中納言の 薫し 事之上古の
あそびの

か中人の 庭あそび

河 孫

^親 親取らるる 御人 薫し 事

同云 薫の 薫し 事 薫し 事 薫し 事
薫し 事 薫し 事 薫し 事 薫し 事
薫し 事 薫し 事 薫し 事 薫し 事
薫し 事 薫し 事 薫し 事 薫し 事

一巻 薫し 事 薫し 事 薫し 事 薫し 事
礼と 薫し 事 薫し 事 薫し 事 薫し 事
事 薫し 事 薫し 事 薫し 事 薫し 事
事 薫し 事 薫し 事 薫し 事 薫し 事

かんの志あいらんーあひて

^秘 玉うろく 養

じくくれ口張うき治りぬ

むろくの洞 川石不見点アリ

まのじーくわ

^秘 源氏の事 昇

かまの院のうへ

葉の匂よむろくくれあうくくくくくくくくくく
そくこれあよ冷泉院の今よ水心

けきあをさか

あひまふくくくくくくくくくく

^秘 葉の洞と秋のまの匂よもあつた

あらんーてあやもくそくーあすん

くしあうわくく

うきぬまののぬくくくくくくくくくく

うらんをせま

^秘 神んはよあつたをくくくくくくく

くしあうわくく 昇 養

美

うきぬとこよあはうてんうの
まにこいすあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

院
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

養 糸 昇

女ニ文より文ハ院より院のまじりて
今宵誕生の文もあらく

し、女流の西子こらへ

の けいけいけい

尺やとあぐり里こりてきこりてきこりて

うれよつぎをこ

里任便も人の物とす

ふあもきりて

院もも里居成り給しかりて

かめめりて

蕙ハ院へとりて

いづこも心や

女御林好く

おさあしおほきありて

玉うすれ心乃遠く

とたひ事とるひらわら

かきもる事とおしい

とうこけりて

何れ此の通り也

^并

あつくりしき

^秘

^兼

是のあつりよふこと此の是れ

多のこちうさばなり

濃くあつる

私漢よりあつりくつるさやうなる

こちやうのあつり深き此のあつり

あつりよふこと此の濃とつりあつり

きとあつりあつりさやうなる

人乃れやめ

^秘

むろりしき

^兼

物の分別も各人よありせり

とちをぬへさつりわくたりしき

私人のおやめり物なかりしき

此のあつりしきとちとちとちとち

とちとちとちとちとちとちとち

おつりしき

^兼

大やうな

ふらふらとわたりぬ

冷泉院のみやすき 兼 薫の排巻

宇治此いぬ君の心を語り

宇治文姫恋此の紅梅巻

宇治八宮の姫恋あけそは此巻の

兼 秘

権中の中程小あきら 兼

うらわぬ語り

人のあやふいとそかり 是中を薫

此巻

内侍のふんといはれまてあきら

中書と里におくすめ

いそいでしひめ

うらわぬ語り

ちかきとみましる

玉 秘 うらわぬ薫成じこめてとんま

し 兼

玉 秘 警此巻之薫中細成成舞あてとんま

ふとふと

大いよのをきく　ふあふあ　ひん
かりかり

花　わかいあゝ紅梅のたふはのあゝ舞
のあれ東もあゝわう　右ふはの大御
こあやそく　あゝあゝあゝあゝ
ちろく　あゝあゝあゝあゝ

美　わあゝあゝあゝあゝあゝ
秘　紅梅大はあゝ　舞

これよのひん

秘　わう　あれ東　舞
美　あゝあれよの　あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

賭弓還郷　左端

後撰第四回す　あゝあゝあゝあゝあゝ

之条大は
女郎の奇

私あゝあゝあゝあゝあゝ

花

た大臣の賭うすまひ此くうりや
みしたきう錦文此出まよと例
右大臣此大譽日福一すまふと云

秘

た大臣乃お樞のりみさすはさりて
あよまうしうかろ人しあう此事に
白文の所おまうつ例そまを信引ま

昇

そよの光と

昇

紅梅大臣白文と光にまきり
とたくしあす

りてしはさま

秘

紅梅大臣の女

昇

宮そいれみり

秘

白文の心成しあはらう

昇

昇

管乃文の娘も西心川
出之紅梅

巻小みり

ねしと水のう

紅梅大石月水方へ 翠峯

薫としこやうくくをえ

とけりれくくくくく

蘇玉の夜よそとありれのくをなすへ

おろくく殿の東あれ隣へ 峯 翠

紅梅大石の家あり

じくくくく出くきそ

頼玉の大饗食れよとるおろくく 翠

故えうせけりけくれくおれれくめか

いまいし事と

志本柱の志堂若く卿文うせけり

後やうて紅梅右大石おいけり

乃あけけきえやうおけりしゆとくそ

かいつりと申くく名すくくおろく

ま女うら乃んくくくくくあひあひせ

らきくくく

菅若くく文此事くく後志本柱の

若く紅梅大石おいまいし事いれ

やうな事をしていふ事なく
物さうくくわぬり世間ありさ
由りくれあうやむはつた観
——

昇
菅若の後に印梅室 志木権君の

事成りしよし

杉のいとさす

美
印梅のうひり物人

何とさうし事とさうし

——今果報の人

かふと

さうめるれせや

美
印梅志の女あれと志木権の

ふりり業如いむうれ我腹の

らあやうやとたう事と然り

いひまわらう

美
志木権君の今時成えれと

あれと菅若此後二丈と足踏

文小中儀ありあはれ又も腹の事と
不い所をいれりいおまれと又
時りあひ給りぬり

不詮つ川まらも千人いりてはま
子と申れ子と成果報とまら
り

たれ大飯の宰相中将

^秘 龍人少将也 ^美

^昇 又吾れ是宰相也

れりやけのすも人よりいひる

^秘 罪をいふ也

あといつめいり

これをいやす所のむすといふ

とつあは

才七八のり也

^秘 宰相中将のり ^昇 美

みくろしれあはれ

^秘 物より事なり ^美

まひ

むろくはあはれのみまろく

やま 昇 養

はるさくくわはれいれととあつて

すくろあや

古中み皆わくはれととあつて

とつあはれとじりてとあつて

あはれ

いあはれとつてとあつて

事あはれとすくろあつて

すくろあつてとあつて

あつてとあつて

あはれとあつて

舞ふはあはれとあつて

官後のあはれとあつて

あつてとあつて

故あつてとあつて

あつてとあつて

是 昇

箕 蘇之の存生ありて此より進と繁
むししてやう此うら事小の
迷ハス一申也此一言これとて
一皆繁むしして行迹とあや
ちり去るれと清しむし

右 右中將右大弁

右 右中將右大弁
右中弁ハ右大弁ハ如里ハ非番議

あそハ座也ハに
ハたしけく

昇 右中將右大弁

右大弁

右 右中將
右大弁ハ

非 非番議

同云并川卷ハ右中將右大弁
非番議ハ

一谷新義に任とぬうに非義人

ト云人

著 八座あふ人あふぬと云

侍後とさこゆあふうそけは武殿中将

さこゆか

著 教侍後とさこの此御うく教中御

ありてさこゆ御あふうさこゆ

さこゆとさこゆ

著 侍後とさこゆ御あふうさこゆ

兄才此中にいかりのさこゆ

将の官職の中お年ゆさこゆ

さこゆのさこゆとさこゆ

さこゆとさこゆ

年さこゆのさこゆとさこゆ

著 御さこゆの子さこゆとさこゆ

さこゆの官の儀さこゆとさこゆ

母さこゆとさこゆとさこゆ

さこゆと

秘

手鈴の甲子のつぎれと母の甲子
の昇をふしあはよふいふ

第

年齢の甲子のつぎれと母の不遇
の愁あり

人よとくふとわきまをさつり

は巻源侍後 花人少将中又音長

比はくこの右中の右中弁りて

年此種才七八と見くもるなり花人

少将の三位の宰相中おあてとの年

卯と才七八とあり人よとくあつら

いこれこれ人々皆超越とあつた

後侍後いし乳中おあれの年の種

あつた花人少将源侍後よりと口

しとみとこれいふれとこれぬ

果多又政中おの重職への侍後

とよこむありしとすうたあ

しとみとこれいふれとこれぬ

宰相のつぎれと母のつぎれ

昇

夕吾息宰相中將事

玉うす此言（程つき）〜〜〜

ひすめののり〜〜〜

〜〜〜

私宰相〜〜〜此詞耕

〜〜〜

終為後略記也 永正八 五廿一 此昇

夕吾息宰相中將之玉うす此言

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜此詞耕

〜〜〜

夕吾息宰相中將 義人がおはる

玉うす此言（程つき）〜〜〜

〜〜〜

又義人が昔おはる此おりのの後ぬ

〜〜〜

此詞耕雲が

私

義

河花あけき

ねむりゆく此河は冷泉流りも
しづかひあけきやうめて里路
まふらばさうて幸お中おひや
あひくれさあわたりてつきく
中将のありしるはかうて女とよ
るよとひのうらむうらむはまの
前乃却りみちのくくろりといて
あひくろりといすさひまのくくろり

くろりをふく

此乃 養國より

弄花奥。詮スル分

并川 花鳥

女乃こゝろわて品れうさひやとわうと
あけきあけき

品ハ陰也女と陰あれしとさうらふ
あけきあけき又品ハ双細くうら
都乃そりあにうりて下、息り向

いふはなはなとてあはせぬこころや
あはれはなはなとてあはせぬこころや
いふはなはなとてあはせぬこころや
あはれはなはなとてあはせぬこころや

梅のえいひるは曲也

